



児童自ら学びを深める算数科授業の創造～一斉授業を軸とした協働的な学びや個別(最適)な学びの取組を通して～

「挑戦と創造」 学び深く 志高く 未来を拓く

研修だより

令和8年 8 月 3 日
世羅町立せらびがし小学校
No.12

生成 AI に関する研修を受けて

7月31日に開催された世羅教育研究会 ICT 部会の研修に参加し、生成 AI について多くの実践的な知見を得ることができましたので、その内容を共有させていただきます。生成 AI を実際の授業や日々の校務の中でどのように活用するか、あるいはどこまで取り入れるかについては、それぞれの先生方の判断にお任せするものであり、強制されるべきものではありません。しかし、この「AI 時代」において、学校全体としての「知識の引き出し」や共通理解のベースラインは、ある程度校内で揃えておく必要があると考えています。そこで、今回の研修で得た知見や実践のヒントを整理してまとめました。

1. はじめに ～生成 AI の基礎知識について学ぼう～

そもそも機械とAIの違いは？

機械:決まった「ルール通り」に動く技術。

AI:人間の『識別・予測・判断』といった知的な振る舞いを模倣する技術。

子ども達にどんな影響がある？

学校では適切な使い方について十分に教えられていないのにも関わらず、子どもたちは家庭で日常的に使っていること。これはスマホや SNS の普及初期と似ており、「使わせない」ではなく「正しく使う指導」が急務である。

生成 AI は何でも過剰に肯定してくれる性質を持つ。それを風刺した YouTube 動画「AIおじさん」のように、ユーザーのすべてを肯定してくれる心地よさに流されてしまう危険性がある。AI の出力する内容に対して「本当にそうか？」と疑う視点、批判的な視点が欠かせない。

2. 守るべきルールと「3 つの危険性」・公教育のガイドライン

学校で生成AI等を活用する上で守るべきものは？

学校としてのルール設定を行い、文部科学省の「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関するガイドライン」等の公的指針を必ず参照することが大前提となる。

文科省のガイドラインでは、生成 AI の活用は「慎重な利用」から始まり、校務や学習での可能性が認められている。一方で、児童生徒の思考力・創造力を育む観点からの留意事項(宿題やテストでの安易な使用の制限など)や、教育データの取り扱いにおける法的な安全性が厳しく求められている。

学校現場で活用する上での危険性は？

危険性①・・・ハルシネーション(嘘)

もっともらしい顔をして、事実とは異なる不正確な情報を出力する。

危険性②・・・権利侵害

著作権や肖像権の侵害に注意。児童にも指導が必要。

危険性③・・・情報漏洩

機微な個人情報や未公開の校務データを入力しない。入力した情報がAI学習に活用される可能性がある。

3. 具体的な活用テクニックについて

どんな AI が使える？

Gemini

Google が開発した AI。検索エンジンや Google サービスと深く連携している。インターネット上の最新情報を踏まえた回答が可能。

Google ドライブ、Gmail、Google ドキュメントなどのデータと連携し、資料作成やメール文面の作成を補助する。

Gemini Notebook

自分がアップロードした資料(PDF、テキスト、Web サイトなど)のみを学習・分析対象とする AI ツールです。

「アップロードしたデータ」を根拠として回答するため、AI 特有のハルシネーションを大幅に低減できます。

読み込ませた資料をもとに、ドキュメントや表だけでなく、動画や音声など様々な出力方法でまとめることができる。

ChatGPT

OpenAI が開発した対話型 AI で、自然な文章作成や高度な思考整理が得意。

授業アイデアの発案、複雑な概念の解説作成、プログラミング指導などに強みがあります。

最新モデルは、ポスター作成などの作図能力にも長けている。

AIを活用する上でのポイントは？

AIへの指示文(プロンプト)を工夫することが大切。

プロンプトのポイントは(Gemini の場合)？

役割を与える

最初に、「あなたは30年以上のベテラン教師」「あなたは私の悩みを聞いてくれる心理カウンセラー」など役割を与える。すると、その役割通りの視点・能力をもち、より精度の高い回答を得ることができる。

「～するな」より「～してほしい」

人間と同様、AI も「～するな(否定形)」と言われると、かえってその言葉に引っ張られてミスが起きやすくなる。「～してほしい」「こう変えてほしい」というポジティブな指示に言い換えるのがコツ。

タメ口より「敬語」で

乱暴な言葉遣いよりも、丁寧な敬語や理路整然とした文面でプロンプトを入力した方が、AI のコンテキスト理解が深まり、出力の精度が向上する傾向にある。

話題を変えるときにはチャットを新規作成

1 つのチャット画面で話題を何度も変えると、過去の文脈の影響を受けて出力が正確性を失う。用件が変わるごとにチャットを新規作成することが、精度の高い回答を引き出すことができる。

どのように指示すれば分からないときは、逆質問！

例えば、学級通信の記事の作成・作文を Gemini に依頼したいが、「なんて質問すればいいか分からない」というとき、それを AI に質問してみるとよい。「学級の実態に合わせて最適な文章を作成するために、まずは私(教員)に必要な質問をいくつかしてきてください」と質問すると、記事作成に向けて必要な情報を AI が質問してくる。

さらに発展的な活用

Gem

Gem は、Gemini を自分好みにカスタマイズして「特定の分野やタスクに特化した自分専用の AI アシスタント」を作れる機能。

通常の生成 AI だとチャットを開くたびに「あなたは先生として、学級通信を作成する。学級目標「〇〇」に沿った内容の記事を…」など指示を入力し直す必要があるが、Gem を作っておけば一度設定した前提やルールを毎回自動で適用させることができる。

Gem の作成方法



Gemini のサイドバーから
Gem を選択する。



Gem を作成をクリックする。



「名前」や「説明」を入力し、
カスタム指示を設定する。

AI との向き合い方について

AI のように人間を超える知能が誕生したことは、人類史上初めてであり未知の要素が非常に多い。だからこそ、「便利さを受け入れて活用しつつも、慎重に扱う」というバランスが欠かせない。学校現場において「これって AI を使っていいのだろうか？」と迷ったときは、以下の 3 つに立ち返るようにするとよい。

・最終的な責任と判断を「人間(教員)」が持っているか？

AI の出力をそのまま児童や保護者に提示せず、自分の目で精査・修正しているか。
AI を「たたき台」とするという意識で活用する。

・子どもたちの主体的な学びや思考力を奪うことになっていないか？

思考のプロセスそのものを AI に代行させていないか。
各教科で身に付けたい資質能力や見方・考え方に立ち直ることが重要。

